

井戸は円形の石組井戸で、掘方の直径約2.8m、深さ約1.3mの規模で、井戸の底から約0.6mの高さまで、3段の石組みが検出されました。

井戸の中からは、土師質土器（鍋・鉢・播鉢・かわらけ）、陶磁器、木製品が多量に出土しました（写真5・6）。木製品は、片足ばかりの下駄が3個、漆塗の櫛と椀、杭、梵字が墨書された木札2枚などです。

櫛は、いわゆる堅櫛で、黒漆が塗られており、歯が粗いことから馬櫛の可能性がります。この馬櫛を使って、城仏土居屋敷跡の主が乗る馬のお世話をしていたのでしょうか？

一方で、櫛には呪力が宿ると信じられていること、祭祀遺物と一緒に出土することも多い下駄が存在すること、木札に書かれた文字（梵字）が水天の真言（水天呪）であることなどから考えると、井戸を埋める（廃棄する）にあたって水神様を鎮めた祭祀が行われた可能性が指摘できます。

出土した遺物から、15世紀後半から16世紀前半の間に井戸を埋めたと考えられます。

館跡から平城へと改築

中世の安芸国は、周防の大内氏が16世紀の後半に毛利氏が取って替わるまで支配していました。

城仏土居屋敷跡は、「西条衆」とみられる財満氏が14世紀代に築き、同氏が滅亡した後の16世紀中頃に、大内氏により現在の規模である80m四方に拡張して使用した様子がわかってきました。防御性の高い平城へ改築したことは、当時の戦乱の世を生き残るための対策だったのでしょうか。

城仏土居屋敷跡はこの地域で多く見られる館跡の「土居屋敷」からより強固な「平城」へ改築された様子がうかがえる重要な遺跡ということが確認されました。



写真4 石組井戸完掘状況



写真5 石組井戸出土遺物①



写真6 石組井戸出土遺物②

東広島市出土文化財管理センター報
東ひろしまの遺跡 Vol.8
 発行日 2020(令和2)年12月4日
 発行 東広島市出土文化財管理センター
 (東広島市河内町中河内651番地7)
 TEL:082-420-7890 〒739-2201
 編集 東広島市教育委員会生涯学習部文化課
 E-Mail hgh207890@city.higashihiroshima.lg.jp
 印刷 今谷印刷株式会社

東ひろしまの遺跡 Vol.8

県内最大級の“環濠?”と大型住居

ともまつさんごう いせき さいじょうちょう じけ
友松3号遺跡(西条町寺家)



写真1 弥生時代の大型住居跡

友松3号遺跡は、龍王山から南西に延びる低い丘陵の先端に立地する遺跡で、令和元年度に住宅団地の造成に伴い発掘調査を実施しました。

現在1~5号まで確認されている「友松遺跡群」の中の一つですが、これらは同じ丘陵上に立地する一つの遺跡として捉えることができ、その範囲はさらに広がるものと考えられます。

発掘調査により、弥生時代前期から中期、古墳時代と中世の集落跡が確認されています。なかでも弥生時代は、特筆すべきものがあります。



図1 友松3号遺跡位置図(1:7,500)

今回の調査による弥生時代の遺構は、^{たてあなじゅう} 竪穴住居と溝、そして大きな穴が確認されました。

竪穴住居は、一部削平により消失していましたが、直径が約8.5mの円形住居です。現在の住居に換算すると、17.5畳にもなる大きな住居です。2度の建て替えにより、7.1m⇒7.5m⇒8.5mと次第に大きくしていったことがわかりました。また、^{しゅちゅう} 支柱は壁に沿って円形に配置しており、9本⇒10本⇒12本と住居を大きくするにしたがって、大きな屋根を支える柱の数も増やしていったようです。なお、出土土器はいずれも小破片で詳細な時期は検討が必要です。

溝は、幅約3mで調査区を南北方向に横切っており、深さ約85cmで断面「V」字状になっています。平成23年度に調査した友松2号遺跡でも同じ時期、同じ形態の溝が確認されており、両者は連続すると考えられます。このことから、この溝は^{かんこう} 環濠の一部の可能性が考えられます。溝の中からはかなり脆くなった、たくさんの弥生時代前期の土器が出土しており、中には胴部に後から孔をあけている土器も見つかっています。

本遺跡の南側は谷地形となっていくことから、この溝も谷に向かって自然に消滅していくと考えられます。

大きな穴は、谷地形にかかる^{えんべんぶ} 縁辺部で検出しており、たくさんの弥生時代前期の土器、石包丁や石斧などの石器が出土しています。

石包丁は指にかける紐を通す孔部分が欠けており、おそらく石材加工の際、孔あけを失敗した^{みせいひん} 未成品の可能性が高いと考えられます。

遺物の状況などから、この大きな穴はゴミ捨て場として使用された可能性が考えられます。

また、本遺跡からは、石斧、石鏃や未成品と考えられる石包丁などが出土していることから、本遺跡のどこかに石器製作のための工房があったことも考えられます。

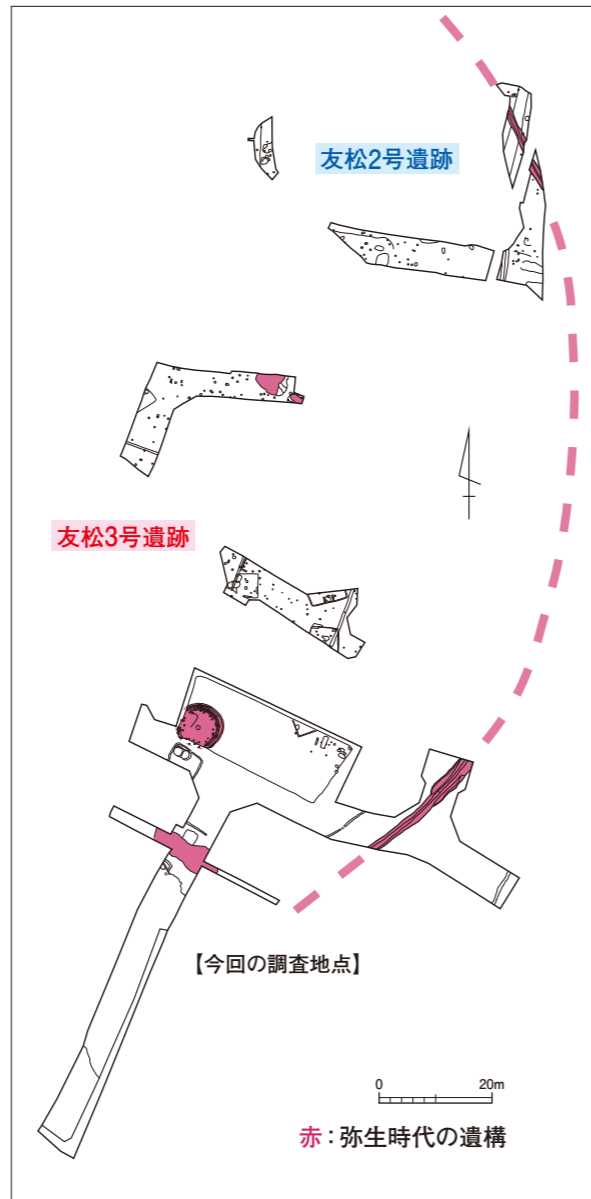


図2 友松遺跡群環濠遺構推定図



写真2 環濠遺構の調査風景

城仏土居屋敷跡の調査から確認したこと

じょうぶつどい やしきあと はちほんまついいだ
城仏土居屋敷跡 (八本松飯田八丁目)



城仏土居屋敷跡は、^{はちほんまついいだ} 八本松飯田八丁目に所在する^{むろまち} 室町時代から^{やかたあと} 戦国時代にかけての館跡です。今回の発掘調査は、宅地造成に伴い平成29年と令和元年に民間の調査組織によって実施されました。屋敷の北側と西側を中心に調査した結果、堀、柱穴、土坑、溝、石組みの井戸などが検出され、土師質土器や備前焼・青磁、木製品などが多量に出土しました。

平成15年にも道路改良工事で発掘調査が実施されており、^{ほったてばしらたてもものあと} 掘立柱建物跡・堀・土塁などの遺構と、陶磁器・土師質土器・木製品(漆器・下駄・羽子板・木簡)などの出土遺物が確認されています。

これまでの調査の結果、周囲に堀をめぐらせ、北側には高さ4m以上の土塁(南側の土塁は、ほぼ削平されて痕跡のみ)が存在することが分かり、屋敷の南側には、^{どうろじょう} 道路状遺構(中世の山陽道か?)が存在する可能性が出てきました。

石組み井戸から出土した遺物

今回の調査で注目されるのは、遺物がまとまって出土した、屋敷の北側で^{けんしゅつ} 検出された石組みの井戸です(写真4)。



図3 城仏土居屋敷跡位置図